

吉川英梨

昨年2月某日、私はできてほやほやの『海蝶』の原稿を抱え、横浜へ。作品の舞台となる横浜海上保安部と巡視船「いず」の取材、そして元特殊救難隊のOBの方にアドバイスを頂くためでした。

その1カ月前に清水海上保安部に伺ったときはまだ原稿ができていなかったもので、私の方が「何を聞いていいかわからない」状態。巡視船「おぎつ」の乗組員のみなさんも若干戸惑ってらっしゃったのですが、今日の私は、

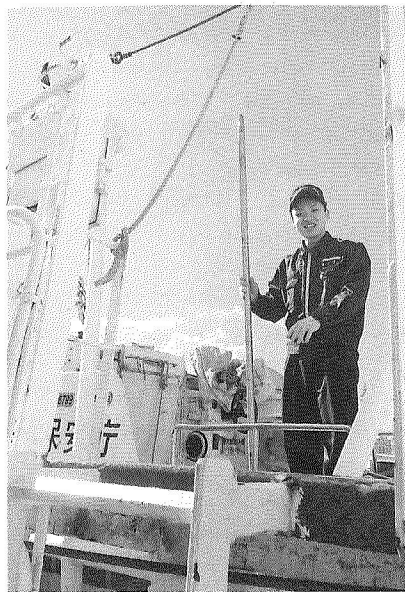
「聞きたいことだらけ！」

前のめりだったからか、巡視船「いず」の潜水士のみなさんはノリノリ。一緒にカレーを食べた時間がものすごく楽しかったのを覚えています。

当時の潜水班長の森真俊さん、取材に同行してくださった元特殊救難隊の切通亮さんをはじめとする皆さんにいろいろと解説していただきながら、潜水用具を見たり、ポンペを背負う手順を見せていただいたりしました。このあたりは『海蝶』の主人公の初潜水場面で活用しましたが、リアルに書けたおかげでより緊迫感が出たと自負しています。

その後、OICにて海底探査機の映像を見せていただきました。特に印象に残ったのが、2019年5月に銚子沖で発生した貨物船同士の衝突事故での潜水捜索の映像です。「船内からたたくような音がした」という報道が当時一斉になされていた事案でした。潜水士が船体を叩いた直後に返ってくる音が、生存者が叩いたものなのかどうかは

取材に詳しく解説してくれた1人、潜水士の森さん



私には判断できませんでした。海に沈んだ物体から鳴り響く音はいまでも耳に焼き付いています。現場の潜水士のみなさんはもっと何かを感じたのではないかと——これまで和気あい

部救難課長の寺門嘉之さんにも海難発生時の対応を教えてくださいました。

そもそも私は海難現場が波や風で移動してしまうという認識がありませんでした。漂流予測

## 「水深60mで捜索した場合」素人の愚問にも…

あいとしていたOICがこの音を聞いたと勝手に静まり返ったのを見て、察しました。

この音は結局、生存者が発したものではないと判断されたとのことですが、海難が発生した船の中から聞こえる『音』に何ともいえない気持ちになりました。

さてこの日の取材では森潜水士に、『海蝶』の中で犯人が最後に使う凶器を提案していただいたり、切通さんを含め当時の三管本

について教えてもらいながら「本当に私はまだまだ海の常識を知らないんだな」と反省したものです。知らないと突飛な発想をしてしまうもので、例えば「水深60m地点で環状捜索した場合」と私が質問を切り出したときの、切通さんと寺門さんの「え!?!」という反応……。要は、「そんな深いところで環状捜索なんかするかいっ!」ということなのですが(笑)、お二方とも小説家の突拍子もない話に大真面目に付き合ってください、アドバイスしてくださいました。切通さん、寺門さん、そして巡視船「いず」のみなさん、本当にありがとうございました。

というわけで、これにて『海蝶』の現場取材は終了。自宅に帰って早速原稿を直し、堂々、自身初の海保小説『海蝶』が誕生しました!

次回で『海蝶ノート』は最終回です。

(つづく)

「そんな深いところですかーいっ!」など丁寧に答えてもらい感謝、感謝